

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

加藤文三先生

日 時：2015年7月25日・9月26日・12月1日

場 所：千葉県千葉市花見川区

聞き手：茨木智志・大木匡尚・鈴木正弘

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、加藤文三（かとう ぶんぞう）先生がお引き受け下さった。加藤先生は1930年のお生まれで、東京都立大学在学中に研究会で作成した「石間をわるしぶき」は大きな反響を呼び、1953年に東京の中学校社会科教師になってからは、次々と独自の教育実践を発信して議論を巻き起こし、その後も歴史や教育に関わる数多くの著作を発刊されてきた。

以下は、加藤先生のインタビューの記録である。

1. 生い立ち

— 本日はよろしくお願いいたします。まず、生い立ちからお聞かせください。

生まれは高円寺（東京都杉並区）¹です。1930年3月に生まれて、小学校に上がる前まで、高円寺にいました。小学校に入るときに、陸軍将校であった父の仕事の関係で、広島市に引っ越しました。1年で、父が「満洲」の新京²に転勤になりましたので、2年生からは新京の順天小学校に転校しました。軍人の住んでいるところからバスで小学校に通いました。ぼくは自動車に酔うので、学校に着くころにはフラフラになっていました。それでガクンと成績が落ちました。

¹ 高円寺：1930年当時は東京府豊多摩郡高円寺町。後に東京市杉並区となり、1943年から東京都杉並区となる。

² 新京特別市：現在の中国吉林省長春市。1932年に日本が建てた「満洲国（帝国）」の首都であった。

— 当時の「満洲」の様子はいかがでしたか。

新京の街は、駅を降りると大同大街というまっすぐな道があり、大きなロータリーの大同広場という公園があって、さらに行くと軍人の宿舎がありました。駅の近くには日本人も住んでいましたが、中国人の集落があって、そこにもときどき遊びに行きました。冬には帰り際に、先生が校庭に水をまくと、スケート場になりました。順天小学校は卒業生の会もあります。

特急「あじあ」³も乗りました。大連から乗ります。すごかったですが、おっかなかったです。大きな川を越えるときは、列車に日本兵が着剣して立っていました。匪賊^{ひぞく}が出るためですね。それから「満洲」に来ると、列車から見えるところの草を全部なぎ払ってあります。匪賊が隠れるといけないからです。

3年生になったとき、また父が転勤になって、高円寺の家に戻ったので、杉並第三小学校⁴に転校しました。小学校の授業は、歴史の授業も含めて、あまり覚えていません。ただ、小学生のときに古事記と日本書紀を読むのが好きでした。歴史に面白さを感じた最初ですね。どのような本で読んだのかは忘れてしまいました。このころは『少年倶楽部』の「のらくろ二等兵」や「冒険ダン吉」が楽しみでした。

2. アジア・太平洋戦争開戦

— アジア・太平洋戦争が始まったのは小学生のときでしょうか。

小学校6年のときにアメリカ・イギリスとの戦争が始まりました（1941年12月8日）。よく覚えています。朝起きた瞬間にラジオが鳴っていましたから。

一番上の兄は学徒で動員されて、二子玉川^{ふたこたまがわ}（東京都世田谷区）の連隊から朝鮮に行きました。二番目の兄は海軍を受けて霞ヶ浦^{かすみがうら}（茨城県）の予科練に入りました。

軍人であった父は、ラバウル⁵にいました。父は戦後に復員しましたが、色々なものを持って帰りました。この印鑑と印鑑入れは、撃墜したアメリカ軍の飛行機のジェラルミンの部品です。これは戦地で兵隊に作らせた紙で作った図鑑です⁶。ラバウルで自給自足するために当地にあった植物を全部調べさせて、どうしたらどう食べられるかを書いたものです。この中に父が描いた絵もあります。これは、ラバウルのヤシの木で作ったフォークです。

³ 特急「あじあ」：戦前の南満洲鉄道株式会社（満鉄）を代表する特急列車。豪華な高速列車として知られた。

⁴ 東京市杉並第三尋常小学校：戦時中の国民学校の時期を経て、現在は杉並区立杉並第三小学校（東京都杉並区高円寺南）。

⁵ ラバウル：ニューブリテン島の東端に位置する都市。戦争中に日本軍が占領し、軍事拠点が築かれた。現在はパプアニューギニア独立国の東ニューブリテン州に属する。

⁶ 2609 剛第七五九一部隊編纂『ラバウル周辺食用植物図鑑』私家版。

それからステッキもありました。

父がいた電信隊は、東京、広島、新京にしかありませんでした。その中で転勤していました。祖父は、明治の紀州藩の士族でした。父は青年時代に、ヨーロッパから音楽家が来ると帝劇（帝国劇場）に通っていた、軍人らしからぬ出来ない軍人でした。子供にも、モーツァルトの「フィガロの結婚」のアリア（独唱曲）で、「恋とはどんなものかしら」を日本語に作り替えて歌わせていました。ぼくは大人になってから、こういう歌だったのかと知りました（笑）。父は1946年に復員してきました。新京で別れてからは、敗戦で復員するまでは全然会いませんでした。

— 先ほど、ご兄弟のお話がありましたが、『すべての生徒が100点を』の中で、加藤先生は「文三」という名前だけでも三男ではないと、最初の授業で中学生の「常識」をひっくりかえすことを紹介されています。

ぼくは5人兄弟の4人目です。父は勇三で、地三、春三、光三、文三、弘三の5人兄弟です。

— 皆さん「ぶんぞう」「ぶんぞう」と呼んでいるが、本当は「ぶんぞう」ではないとも伺いましたが。

自分でも「ぶんぞう」と名乗っていますが、「よしみ」と言います。親戚の他に、誰も「よしみ」と呼ぶ人はいません。父は「ゆうぞう」ですけど、兄弟は「つちみ」、「はるみ」、「てるみ」、「よしみ」、「ひろみ」です。

3. 陸軍幼年学校入学と敗戦

— 小学校卒業後のことを、お聞かせください。

小学校を卒業して、中学校（旧制）は日大二中⁸に進学しました。兄の春三が日大二中に進んだ関係で弟たちは皆、日大二中に通いました。日大二中は、わりと自由主義的な先生がたもいましたね。特にそのときの歴史の先生が面白くて、歴史にかなり引き付けられました。西洋史の先生でした。それから、地理の先生の話が面白くて、それに聞き入っていました。

日大二中の生徒として陸軍幼年学校⁹を受験しました。幼年学校は通常の中学校の1年生

⁷ 加藤文三『すべての生徒が100点を』地歴社、1976年、5～13頁。該当箇所の初出は、加藤文三「歴史教育の理論化のために（一）まず、楽しい授業を一ササン朝ペルシアをどう教えるか（1）」『歴史地理教育』第238号、1975年6月。

⁸ （旧制）日本大学第二中学校：現在の日本大学第二中学校・高等学校（東京都杉並区天沼）。

⁹ 東京陸軍幼年学校：13歳以上（旧制中学1年修了程度）の男子を入学させて「軍事上ノ必要ヲ顧慮シテ

と2年生が受験できる学校でした。そのため中学1年を終えた生徒と中学2年を終えた生徒が同時にいました。1944年4月に入学しました。本来は3年間の学校で、卒業後は陸軍予科士官学校そして陸軍士官学校に進む予定でした。陸軍予科士官学校は、幼年学校卒業生の他に、中学4年か5年を終えた生徒が入ってくる学校でした。

学校は八王子にありました¹⁰。以前は新宿の市ヶ谷台にありました。ぼくたちが1年生に入ったときの3年生は前の校舎に通っていました。朝鮮人を使って工事をやらせていたそうです。生徒は1学年360人くらいでした。大正天皇の陵（多摩陵）のすぐ隣にありました。

— 陸軍幼年学校は、入学が難しく、軍人の子弟が多かったと聞いていますが。

同じ部屋にいた者について見ても、それほど多いという感じではありませんでした。受験は英語、数学、国語などみんな受けました。倍率も高くて、日大二中から30人受けましたが、受かったのは2人だけでした。

— どのような生活だったのでしょうか。

ぼくは、語学はフランス語でした。全部フランス語を使って授業することもありました。「第1学年第5学班全員出席しています」というのをフランス語で報告して授業が始まります。ドイツ語はなかったですね。戦争する対象をソ連にしていたから、ロシア語はありました。ロシア語がほとんどで、ほんの一部分がぼくらのようにフランス語をやっていました。事前に語学の希望は聞かれませんでした。数学や音楽もありました。歴史もありました。教科書は普通の学校とは違う幼年学校用のものでした。

幼年学校の生徒は軍人でした。給料も兵長の給料をもらっていました¹¹。階級は兵長ではありませんが、肩と襟には幼年学校の金色の印を付けていました。ですから、立派な兵隊さんが街で会うと、ぼくたちに敬礼していました（笑）。

幼年学校の同級生にはいろいろな友人がいました。朝起きると階段を駆け下りて整列して点呼があり、その後、近くの山に登って軍人勅諭¹²を朗読し、終わると朝食までの時間を、各自の意志で剣道や柔道の練習をするという毎日でした。外出して家に帰っても、毎

普通学科ヲ教授シ軍人精神ヲ涵養スル」（「陸軍幼年学校令」、1940年）3年制の軍の学校。当時、東京を含めて各地に5校が存在した。卒業後は陸軍予科士官学校（2年）、隊付勤務（半年）を経て、陸軍士官学校（1年10月）に進み、陸軍将校に任官するのが基本であった。

¹⁰ 東京都南多摩郡横山村（現・八王子市長房町）。1944年4月に牛込区（現・新宿区）の市ヶ谷から移転し、東京陸軍幼年学校の地としては建武台と称した。

¹¹ 1944年から生徒を兵籍に編入して納金制を廃止し、手当てを支給するようになったという（百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本—制度と実態—』吉川弘文館、1990年、339頁）。当時の陸軍の「兵」は、二等兵・一等兵・上等兵・兵長の順に階級が上がった。

¹² 軍人勅諭：1882年の「陸海軍軍人ニ下シ給ヘル勅諭」。長文の勅諭であったが、陸軍将兵にはこれを暗唱することが求められた。

朝、ぼくはいつも制服を着て、近くの神社で軍人勅諭を朗読していました。

一番上の兄は学徒出陣¹³で引っ張られましたが、学徒出陣でしたので兄は兵隊（将校や下士官ではなく）でした。家に帰って、ぼくが神社で軍人勅諭を朗読しているときに、その兄が家に帰ってきて、わざわざ神社まで来て「帰ってきたぞ」と声をかけてくれたのに、チラと見ただけで、軍人勅諭を読み続けていました。兄弟のつながりよりも軍隊の中の秩序を重んじる気質が浸透していたんですね（笑）。また、母がご馳走をつくって幼年学校のぼくのところに持ってきたことがありました。ぼくがご馳走に見向きもしないでいると、持って行ったご馳走を「兄は喜んで食べていたよ」と、母から言われたことがありますが、それに対して、ぼくは一言、「兄は兵ですから」と言ったことがありました（笑）。軍人として徹底していましたね。

— 八王子空襲のときには、幼年学校にいなかったとお書きになっています¹⁴。

ぼくは平塚（神奈川県）に疎開していた母のところに、たまたま外出で行っていたため、八王子空襲¹⁵のときは幼年学校にいませんでした。その日の空襲で全部焼けてしまいました。空襲の翌日に戻ってきましたが、八王子ではほとんどの家が無くなっていました。ぼくが入るべき、ぼくの作った防空壕に友人が入って、直撃弾を受けて死んでいました。

— 幼年学校も爆撃目標になっていたということでしょうか。

アメリカ軍の空襲というのは非常に精確ですね。高円寺の家は空襲からは免れましたが、近くの橋がねらわれて爆撃されたこともありました。1942 年の東京初空襲¹⁶のときは高円寺の家から見ていました。低空を飛んで行って爆弾を落としていきました。

— 敗戦のとき（1945 年 8 月 15 日）はどのようなでしたか。

2 年目の 8 月 15 日まで幼年学校にいました。敗戦で幼年学校は廃校になりました。学校が占領されるだろうということで、命令で全部焼きました。書類から教科書から全部です。ひどいと思ったのは、自分が持っていた『広辞苑』（辞苑）も焼けと命じられて焼いたことです。戦争とは関係ないのにと思いました。

¹³ 学徒出陣：高等教育機関に在籍していた学生・生徒に対する徴兵猶予が 1943 年 10 月に廃止されたため、在学中に徴兵され出征したことをいう。

¹⁴ 加藤文三『昭和史歳時記』青木書店、1978 年、5～6 頁。

¹⁵ 八王子空襲：1945 年 8 月 1～2 日の夜の米軍の爆撃機による空襲。400 名以上の死者が出て、市街の 8 割を焼失した。

¹⁶ 東京初空襲：1942 年 4 月 18 日、空母から出撃した 16 機の米軍爆撃機が日本各地を初めて爆撃した。東京には昼に 6 機が飛来し、39 名の死者が出た。指揮官の名からドーリットル空襲とも言われる。

4. 敗戦後の学生生活

— 敗戦となって幼年学校の廃校後は、どうされたのですか。

日大二中に戻って中学校4年生になりました。日大二中は、校舎は残っていました。

8月15日で、読む本が変わりました。日本は科学が弱かった、科学をしっかりとやらなくてはいけないということで、科学の本をいろいろ読みました。一番確実なのはということで数学をやりました。志望がまったく変わったわけです。

1947年3月に日大二中を卒業して、(旧制)武蔵高校¹⁷の理科に入学しました。

— なぜ武蔵高校を選んだのですか、また、理科ということですが、どのような勉強をされましたか。

家に一番近い私立高校が江古田^{えこだ}(西武新宿線)の武蔵高校でした。友人も多く受験しました。

高木貞治¹⁸の『解析概論』を熟読しました。また、ドイツ語を徹底的にやりましたね。そのとき教わったドイツ語の力で、その後、マルクスの『資本論』全3巻をドイツ語で2回読みました。1・2年のときの一番仲のよい友達であった有馬朗人¹⁹には、いくら頑張っても物理で勝てませんでした。それで、ぼくは理科をやめて文科に移りましたが、その後、彼は東大の総長になりました(笑)。

— 加藤先生の書かれた『昭和戦後史』の中の「戦後史年表」の「著者の歴史」を見ますと、1948年は「18歳。武蔵高校2年生。[医学雑誌]メヂカルフレンド社でアルバイト。その女性に初恋。片思い。死を決して箱根仙石原をさまよう。ゲーテの『ウェルテル』からホメロスに親しむ」、1949年は「19歳。武蔵高校3年のとき文科に転科。HOLY BIBLE, KING'S VERSIONに読みふける」とあります²⁰。

そんなことを書きましたか(笑)。理科にいたときに興味が変わりましたね。3年になるときに、文科に転科しました。転科は簡単でした。でも、ドイツ語から英語に戻ってしまいました。

¹⁷ 武蔵高等学校高等科：尋常科4年・高等科3年の7年制高等学校であった。現在の私立武蔵中学校・高等学校および武蔵大学(東京都練馬区豊玉上)。旧制高校は文科と理科に分かれるのが基本であった。

¹⁸ 高木貞治：1875～1960年、数学専攻。『解析概論』は岩波書店から1938年(1943年増訂版)に発行され、現在も版を重ねている。

¹⁹ 有馬朗人：1930年生まれ、物理学専攻。

²⁰ 加藤文三『昭和戦後史一歳時記ふうにつづる戦後の歩みー』上・下、青木書店、1984年。引用は、下巻の「戦後史年表」3～4頁から。

— 戦後の旧制高校では「社会科」が1946年5月に設置されたり²¹、新たな歴史教育が検討されたりしたようですが、ご記憶にありますか。

社会科はまったく覚えがありません。それに、歴史の授業も記憶にないです。旧制高校卒業生の最後になります。下の学年からは新制高校の卒業に切り替わりました。

5. 東京都立大学人文学部への転入学

— 旧制高校を卒業後に、新制大学の都立大（東京都立大学²²）に入学したのですか。

1950年に、都立大の2年生に転入しました。新制大学は4年間ですが、3年間でよいということで、語学は免除でした。この頃、このような形で旧制高校から転入した人はけっこういました。東大に行くんだと、しきりに試験勉強をしている友達もいました。新制大学としては一番上の学年でしたので²³、上には誰もいませんでした。

都立大に行ったのは、都立大というのが新しくできるからと、武蔵高校の先生が勧めてくれたからです。あまりやる気はなかったのですが、とにかく受けて入ったという感じです。試験は4月にありました。

入ったのは人文学部です。卒業するときには文学士とか何とかいろいろに分かれるものですが、自分は人文学部なのだから人文学士でいいと頑張って、一人だけ人文学士で卒業しました。

— 都立大学ではどのような先生がたがいましたか。

都立大に入って一番面白かったのが、松本新八郎²⁴先生の講義でした。日本中世史でしたか、すごく面白かったです。講師で来ていた先生でした。昼間部と夜間部の授業があるのですが、ぼくたちは昼間の松本先生の授業に出て、そのまま教室に残って夜間の授業時間に続きを話してもらって、通しの3時間くらいの授業を受けていました。それでも時間が足りないと、大学前のそば屋に入って、その2階で話を聞きました。

松本先生は、石母田正²⁵、林基²⁶、藤間生大²⁷といった皆さんと仲良しでしたから、ぼ

²¹ 戦後の旧制高校における「社会科」は、新学制下の初等中等教育の「社会科」とは別に検討されたものであるが、実施状況等の詳細ははっきりしない。これについては、片上宗二『日本社会科成立史研究』（風間書房、1993年、618頁以下）が触れている。

²² 東京都立大学：旧制の（東京）府立高等学校（後に都立高等学校）を中心にいくつかの都立専門学校を前身として1949年に開学した公立大学（東京都目黒区。1991年に八王子市に移転）。2005年に東京都立大学に、他の都立の大学・短大を統合した首都大学東京が開学し、2010年度末に閉学した。

²³ ごく一部を除いて、新制大学は1949年度に発足した。

²⁴ 松本新八郎：1913～2005年、日本史専攻。

²⁵ 石母田正：1912～1986年、日本史専攻。

²⁶ 林基：1914～2010年、日本史専攻。

²⁷ 藤間生大：1913年生まれ、日本史専攻。

くたちも仲良くなりました。

都立大は一つの建物の中に学部がありましたので、一回りするとだいたい全部の学部が回れました。ギリシア史が専門の太田秀通²⁸先生や朝鮮史が専門の旗田 巍²⁹先生のところにも行っていました。皆さん若かったです。

民法学が専門の唄孝一³⁰先生とも仲良く付き合っていましたし、法社会学が専門の石村善助³¹先生には、かわいがってもらいました。塩田庄兵衛³²という先生は知っていますか。社会運動史が専門で、『日本社会運動人名辞典』（塩田庄兵衛編集代表、青木書店、1979年）という、多くの人物を総動員した辞典をまとめています。塩田先生からはドイツ語の『資本論』を1冊ずつ借りて、在学中に全部読みました。

— 『昭和戦後史』掲載の「戦後史年表」の「著者の歴史」のこの時期を見ますと、都立大2年生のときの1950年には「都立大歴研・社研結成」「新聞部に加入」「AGにも所属」「レッドパージ反対闘争で奔走」とあります³³。また、本文では「私のほんとうの青春は、この1950年にはじまります」と書かれています³⁴。

「都立大歴研・社研」は、都立大学歴史学研究会と都立大学社会科学研究会です。ぼくたち学生がつくりました。歴研と社研は別なものです。ただしメンバーはほとんど同じでしたね（笑）。新聞部にも入りました。「AG」（アージュ）は、アンチ・ゲール（Antiguerrre。反戦学生同盟）です。1950年2月に、平和を守るためのストックホルム・アピールがありました³⁵。その影響だと思います。

— レッドパージは、そんなにひどかったのですか。

ひどかったです。都立大では直接かわりませんでしたが、レッドパージをやれと日本中に講演してまわったイールズのような人もいました³⁶。

²⁸ 太田秀通：1918～2000年、西洋史専攻。

²⁹ 旗田巍：1908～1994年、東洋史専攻。

³⁰ 唄孝一：1924～2011年、法律学専攻。

³¹ 石村善助：1924～2006年、法律学専攻。

³² 塩田庄兵衛：1921～2009年、経済学専攻。

³³ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 下』、「戦後史年表」5頁。

³⁴ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 上』、48頁。

³⁵ スtockホルム・アピール：米国とソ連の核兵器拡大に対して、1950年3月に核兵器禁止のための署名を世界に呼びかけた平和擁護世界大会のアピール。日本へは2月に会議参加が招請され、600万を超える署名が集められた。

³⁶ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 上』46頁以下でレッドパージの状況が紹介されている。W.C. イールズは占領軍の民間情報教育局顧問として1949年以後、大学からの共産主義者の教授の排除を説いて回り、これに対する反対運動が起こされた。

- 同じく「著者の歴史」の都立大学3年生の1951年には「都立大土曜会委員長」「都立大自治会副委員長」「自治会の大衆化のためにたたかう」とあります。

土曜会はいろいろな党派を超えた民主化のための会議でした。自治会とは別にやっていました。

- 同じく「著者の歴史」の都立大学4年生の1952年には、「民族芸術を創る会の運営委員となる」「メーデー事件で負傷」「紙芝居『秩父おろし』を作成」「秩父に行き『石間をわるしぶき』を作成し、『歴史評論』に発表」とあります³⁷。「民族芸術を創る会」（1952年2月）とはどのようなものですか。

ここに「民族芸術を創る会」の会報があります。江田 豊^{ゆたか}さんという女性が事務局をやっていました。歴史や芸術のいろいろな団体が集まって、大衆的な芸術運動を盛んにしようとした会でした。人形座³⁸が中心になってやっていました。木村次郎さんが人形座の指導者でした。会報にはいろいろな人が書いています。石母田正先生は、自分は参加しなくても中心的にやっていて、石母田先生の友達がみんな入っていました。ぼくも参加していました。

- 会報では、都立大歴研の紙芝居秩父おろしという記事もありますが、これは加藤先生がお書きになったものですか³⁹。それから、紙芝居「秩父おろし」は、「民族芸術を創る会」の活動であったのですか。

これは、ぼくが書きました。ぼくは学生を代表して入っていました。だからあまり名前を出さないで都立大歴研代表として書いています。紙芝居「秩父おろし」は「民族芸術を創る会」がつくったわけではありません。でも、つながってはいます。紙芝居を作ったから「民族芸術を創る会」に参加しようというものです。

- 「民族芸術」の「民族」はどういう意味でしょうか。いわゆる「日本民族」の「民族」ですか。

いや、違います。内容的には「民俗」、フォークロア (folklore) に近いですね。あまり分けていません。

³⁷ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 下』、『戦後史年表』5頁。

³⁸ 人形座：1952～1963年に全国の小中学校をまわって人形劇を上演した人形劇団。

³⁹ 都大学生歴研「『秩父おろし』〔紙芝居〕をつくるかいにだして」民族芸術を創る会会報『創るかい』第2号、1952年6月20日。なお、『創るかい』第1号（1952年6月6日、4頁）には「都立大学生歴研の創る会参加『秩父騒動』紙芝居グループ」の記事があり、「六月一日の都立大学文化祭に、秩父騒動の紙芝居が上演され」、「六月九日の創る会でとりあげて皆で討論」していく予定である旨が書かれている。

6. 石間をわるしぶき（その1）

- 都立大学4年生のときに都立大歴研の皆さんと秩父に行かれて作成された「石間をわるしぶき」（1952年）について伺います。

4年生になって石母田正『歴史と民族の発見』が出て、読みました⁴⁰。特に、その中の「村の歴史・工場の歴史」に、ぼくは強い影響を受けました。この本を読んで、歴史というのは古文書にあるようなのが歴史だと思っていたのが、人間の住むところ、どこにでも歴史があるということを教わりました。これが背景にあります。

- 加藤先生が1973年に出版された『石間をわるしぶき⁴¹』では、1952年夏の秩父の調査には、丸山泰、庄司一喜、中沢市朗、平井久子、久野澄恵、加藤文三の6名が参加したこと、「血のメーデー」事件（5月1日）をはさんで、春と夏の2回にわたって秩父の上吉田村石間の沢戸部落⁴²に入ったことが述べられています。そして、夏の調査のときに『石間をわるしぶき』というパンフレットをつくって全戸に配布し、それを手直しして1952年11月の『歴史評論』第40号に発表したと説明されています。こちらがお手元にある当時の資料ですか。

これが、石間に関わる資料をまとめたもの（ファイル）です。石間関係は全部この中に入れました。

- この印刷物が、このときに作成された『石間をわるしぶき』ですね⁴³。表紙に鉛筆書きで「B. Kato」とあります。後に刊行された「石間をわるしぶき」にはない挿絵がありますね。沢戸の小学校で印刷して、すべての家に配布したということですが。

挿絵は、ぼくではありません。描きそうなのは平井久子さんですね。平井久さんは一緒に行った丸山泰さんと結婚して、丸山久子さんになりました。印刷は、沢戸部落の小学校を借りてやりました。

- 石間関係の資料の中に、「私たちが体験したこと “沢戸部落の歴史”をつくつて（上）

⁴⁰ 石母田正『歴史と民族の発見—歴史学の課題と方法—』東京大学出版会、1952年。「村の歴史・工場の歴史」の初出は、『歴史評論』第12号、1948年1月。

⁴¹ 加藤文三『石間をわるしぶき—国民的歴史学と歴史教育—』地歴社、1973年。同書339～345頁に加藤氏による解説が書かれている。

⁴² 埼玉県秩父郡上吉田村石間：1956年に吉田町と合併し、2005年には秩父市となった（現・秩父市吉田石間）。

⁴³ 東京都立大学歴史学研究会編『石間をわるしぶき—澤戸部落の歴史—』謄写版印刷、B5版、表紙・本文全28頁、1952年8月22日

都立大学歴史学研究会⁴⁴」があります。これは加藤先生が書かれたものでしょうか。日付がありませんが、沢戸に行った後に書いたものでしょうか。また、何かの原稿なのでしょうか。「(下)」はないのでしょうか。

これは、ぼくが書きました。日付は書いていないと思いますが、沢戸に行った後に書きました。「(下)」は書くつもりでしたが、「(上)」を書くので精いっぱい、書いていません。これは自分自身のためのもので、何かに載せるためのものではありませんでした。

— 本文では最初の「目的」のところに、まず『村の歴史』をつくることとあり、改行して「とくに秩父事件がおこる前ごろから現代まで、村の人たちはどのように生活をしてきたのか、そして今どうなっているのか。埋もれている村の歴史的伝統をほりおこし、村の人たちと共に『村の歴史』をつくる」と書かれています。そして、改行して括弧書きで「(目的についてはあとの“私たちは何のために農村にゆくか”の討論を参照すること)」とあります。次に、「場所」として「埼玉県、秩父郡、上吉田村、石間、沢戸部落」とあり、「期間」として「八月十一日——二十二日 (一九五二年)」と書かれています。

その次に「参加者」として氏名等が列挙されています。そのはじめに、「加藤文三 全期間参加 春にも沢戸を調査した」とあります。先ほどお名前が出た6名の他に、「おわりの二日 初めて」参加という人もいますね。丸山泰さんと中沢市朗さんには「春にも沢戸を調査した」と記載されています⁴⁵。春の調査は3人のようですが、紙芝居「秩父おろし」のためですか。

紙芝居のためではなくて、農村を調べるために3人で行ったものです。これは中沢君が連れて行ってくれました。石間の沢戸部落を、ここがいいよと紹介してくれたのが、秩父出身の中沢君でした。石間は秩父事件⁴⁶発祥の地でもあります。中沢市朗という友人がいなかったら行けなかったですね。

中沢君は夏の調査そのものには、一緒に行きませんでした。だけど、秩父出身で秩父のことで調査に行って、中沢君が行っていないとちょっと変なので、夏にも一緒に行ったことにしました。

— 中沢さんは秩父の石間のかたですか。

⁴⁴ 都立大学歴史学研究会「私たちが体験したこと “沢戸部落の歴史”をつくつて(上)」(年月日の記載なし。レポート用紙に手書き、表紙・本文全29頁〔内、図2頁〕)。中表紙には「農村調査報告—“沢戸部落の歴史”をつくつて— 都立大学歴史学研究会」とある。なお、字体の異なる漢字表記は、通常の字体の表記で本稿では記載した。以下の引用も同じ。

⁴⁵ 以上の引用は、都立大学歴史学研究会・前掲「私たちが体験したこと “沢戸部落の歴史”をつくつて(上)」、2頁。

⁴⁶ 秩父事件：1884年に埼玉県秩父で旧自由党员と農民が起こした自由民権運動の激化事件。政府は軍隊を出動して鎮圧し、死刑7名を含めて約4000名を有罪とした。

石間ではありません。秩父駅をちょっと行くとお風呂屋さんがあって、そこの跡取りでした。3年生のときに彼は、「いまどき勉強などしているときではない」と、都立大をやめて秩父に帰っていました。同級ではなく、ぼくより若いです。その後は、秩父の風呂屋のおやじだけど、いろいろ郷土の秩父のことを調べていた有名人でした⁴⁷。だから、行っていないとおかしいということで、行ったことにしてあげました（笑）。数年前に亡くなりました。

— 1952年6月の都立大の文化祭にむけて紙芝居「秩父おろし」をつくったと、『昭和戦後史』にお書きなっています⁴⁸。

これ（ファイル内の資料）は、紙芝居のもとになったものです。当時、紙芝居は流行っていました。東大は「山城国一揆」、京大は「祇園祭」をつくりました。行くからには、現地の人の関心があるものをつくって持って行こうと考えました。

— 紙芝居の構想を書いた原稿を見ると、場面が30いくつまでありますね⁴⁹。一番はじめは「秩父音頭が聞こえている」から始まっています。これは、加藤先生がお書きになったものですか。

そうです。原稿は、ぼくが書いて、それにいろいろな意見をみんなが言って、書いたと思います。都立大歴研の人だけでなく、美術部の人全面的に協力してくれて、うまく描いてくれました。

— 紙芝居は、相当な物語になっていますね。さっと拝見すると、秩父事件が始まるまでというか、蜂起するまでですね。こちらの別紙は何ですか。

これは紙芝居のテンポ、読み方です。

— 『学園評論』の1952年10月号に掲載された、加藤文三「学評編集部の皆さんへ ひとりよがりだった私達の研究」を見ますと、書き出しに「学評八月号に掲載することになっていた都立大歴研の原稿 —『紙芝居秩父おろし』をつくって— を撤回したいというのは次のような事情によってなのです⁵⁰」とあり、絵を担当する人、ストーリーを考えていく人などの意識のずれがあったなど、「ひとりよがりだった」ということが説明さ

⁴⁷ 中沢市朗（1932～2005年）には、『自由民権の民衆像—秩父困民党の農民たち—改訂版』（新日本出版社、1996年）など、数多くの論著がある。

⁴⁸ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 上』、64頁。

⁴⁹ A5版ノートの草稿では39場面、B5版ノートの原稿では33場面となっている。

⁵⁰ 東京都立大歴研 加藤文三「学評編集部の皆さんへ ひとりよがりだった私達の研究」『学園評論』第1巻第3号、1952年10月、134頁。

れています。ほんとうは『学園評論』の8月号に載せるはずであったのですか。

そうです、それを載せる予定でした。

— 紙芝居は、お手元にはないのですか。

ありません。小河内（東京都西多摩郡）に行った学生が「貸してくれ」と言って持って行って、警官に追われて、本人は崖の上から川に飛び込んで逃げました。それで警察が持って行きました。警察に行くところにあるのでしょうか。ですから、秩父に持って行って上演しようとした紙芝居が持って行けなくなりました。

7. 石間をわるしぶき（その2）

— 先ほどの「私たちが体験したこと “沢戸部落の歴史”をつくつて（上）」の次のページには、次のようにあります。「秩父に行こうということ・・・それが本格的になつたのは七月はじめの研究会で加藤が農村調査のメモを出したときからである。そこでは、一、村の歴史をつくること、二、民族文化をそだててゆくこと、がきまり、・・・農民とともに働きながらしらべようということに一致した」⁵¹。この「民族文化」というのは、どのようなものを指していますか。

すでにお話ししましたが、「民族芸術を創る会」というのがありました。

— 続きですが、『農民に奉仕する学問をつくろう』『農民とともに働きながらしらべよう』ということは、スローガンのようになり、その後も何度もくりかえされた。・・・しかし、・・・そのための具体的な方法とはなれていわれる時には、単なる観念的なスローガンとなってしまう。私たちの場合がそうだった⁵²とあり、8月3日（1952年）に研究会をもって、「なぜ農村にゆくか？」の討論がなされています。

そして、8月10日に「最終の予備討論」がなされた中で、「学園評論第二号を中心にして秩父に行つて具体的にどうするか」の問題、「加藤と丸山から上吉田村の概況について」の説明に加えて、「小河内の山村工作隊の同志から小河内での英雄的な闘争について報告された」とあります⁵³。小河内の山村工作隊については、丸山・庄司・久野・平井の皆さんが「ぼくたちはどんなにアジられても、ぼくたちにできることしか出来ない。とにかく出来ることだけをやってゆこうではないか」と話していたことが記載されています。

⁵¹ 都立大学歴史学研究会・前掲「私たちが体験したこと “沢戸部落の歴史”をつくつて（上）」、3頁。

⁵² 同上。

⁵³ 同上、6頁。

これが紙芝居をなくした話で出てきた小河内村での山村工作隊のことです。山村工作隊は小河内の農民をもっぱら煽動して行動に移すように働きかけていました。〈小河内に行く〉といったら一点に絞られていて、調査なんてものではなくて、〈行動〉でした。小河内に行った学生は学生運動にすごく熱心な理学部の学生で、毎日、人文学部のあるところまで来てアジっていた男でした。

— 加藤先生や皆さんは、山村工作隊には行かなかったのですね。

はい、行きませんでした。

— さらに続きですが、8月10日の「最終の予備討論」では、「一、報告と討論とに十分な時間をさくこと。二、向うにいる間に必ず成果をまとめてパンフにしておくこと」の2点を決めて、『村の歴史』をつくること一本でゆくことになった」と書かれています⁵⁴。こうして皆さんで石間の沢戸に行かれたわけですね。

そうです。石母田先生の提案に応じて、村の歴史を書こうと決めて、行きました。当時の100円持って、10日分の食糧持って準備して、現地に行って、泊まって自活しながら、本を書くという仕事です。そこで聞き取りをしました。あらかじめ出来たものを地域に押し付けるといふ傾向がありました。ですので、それと闘って、実際に泊まり込みました。（地図を見て）集落はこちらにあるのですが、ぼくらは川沿いの掘っ立て小屋に泊まり込んで、朝になると上に登っていました。

— 参加者のほとんどが東京か周辺のかたがたのようですが、秩父の山村についての率直な感想はいかがでしたか。

とにかく行くと、道路が一番の谷底を走っています。山があつて、山の途中に集落があります。とにかく面白いところに來たなという思いがありました。それから、石間に行くには途中で、秩父事件の加藤織平⁵⁵の家があつて前を通りました。

— 一緒に参加された皆さんは、その後、加藤先生のように学校の先生になったかたが多いのですか。

ほとんどの人が、先生になりました。他にできることもありませんでしたし（笑）。

— 各自が調べた結果を記入した用紙や、沢戸部落の各戸の地図、親族関係の図、系図まであります。約10日間で、これだけのものを作ったのですか。

⁵⁴ 同上。

⁵⁵ 加藤織平：1849～1885年。秩父事件では蜂起の副総理を務め、後に捕らえられて処刑された。

家ごとに「大尽」^{だいじん}、「権力者」、「旧家」、「クラのある家」などと地図に書いてありますね。聞き取ったことを用紙にみんなで書き込んでいって、沢戸部落の地図にこれが誰の家だというのを全部作って、これらを10日間でやりました。村の人々の家系図まで書きました。これらをもとにして、ぼくが大部分を書いて、一部を平井さんが書きました。これはかなり克明に調べてやりました。できあがったものを地域に押し付けるのではなくて、地域から学ぼうという姿勢は一貫していました。

— 一般的には、民衆史、地域史あるいは郷土史という枠組みになってくると思うのですが、先生ご自身はどのように位置づけられていますか。

そういうことを突きつめて、どうかは考えていません。これをやった前後にもぼくは、日本史専攻の大学の先生による農村調査に参加していますが、ああいう農村調査はダメですね。全然、人と接していません。まず文書があるかどうか、文書第一主義です。現地の人と解け合うなんてことは考えてもいません。文書は昔の誰かが書いたものですから、文書で書くという時点で現地の人から離れていますよね。ぼくなにか一軒一軒、続き柄を明らかにしていくことが楽しいし、嬉しいんですね。現地から離れて議論している人は、何かむなしいというのか、こっちのほうがずっと楽しいです。

ぼくたちが出掛けて、パンフを作って配るだけでなく、村の中から村のことを研究したいという人が出てきてほしいと思っていました。石間の人を読んでくれて送ってくれた感想や、石間から東京に出てきた人がぼくたちにあてた手紙もここに残っています。調査期間だけ村につながっているのではなくて、ぼくたちがずっと村につながったのと同じように、村の人たちもぼくたちとつながって学んで欲しいという考えが活かされてきたと思います。

— 「石間をわるしぶき」というタイトルは加藤先生がおつけになったのですか。

そうです。

— なぜ「石間をわるしぶき」としたのですか。

格好いいじゃないですか。石間というのが、生活の谷間の岩をしぶきが割っているという感じが出ていて（笑）。

— そして『歴史評論』（第40号、1952年11月）に掲載したのですね⁵⁶。

⁵⁶ 『歴史評論』第40号（1952年11月）に、都立大学歴史学研究会「石間をわるしぶき」、平井久子「私たちが体験したこと」、加藤文三「石間をわるしぶきに寄せられた批判について」の3つが掲載されている。配布した『石間をわるしぶき』と『歴史評論』掲載のものと異同については、1973年の加藤文三・前掲

その前に、『学園評論』での掲載がありました⁵⁷。それに手直しをして、『歴史評論』に載せました。

— 「石間をわるしぶき」には、大きな反響があったと聞いています。

各大学の学生歴研がこれに励まされて、これなら自分たちにもできるだろうということで各地に行ったということがあります。それと歴研同士のつながりが生まれてきました。教育大（東京教育大学）歴研にいた本多公栄⁵⁸さんと知り合ったのもこういうつながりでした。

— 資料の中には、何人かの人たちがそれぞれ書いたものがあります（B4 横書き、ガリ版刷りの用紙）。氏名の欄には「tai」「hisa」「kuno」、それから無記名のものも、これまでお名前のお出でなかった人たちのものもあります。3～5 枚も書いている人もいます。これはどのようなものですか。

これは石間に調査に行った後に、都立大歴研の会員が書いたものです。ここに、「歴研の諸君への手紙」という、ぼくの手紙があります。調査に行かなかった人にも配りました。これを読んで、みんなが書きました。「tai」は丸山泰、「hisa」は平井久子、「kuno」は久野澄恵ですね。無記名はだれでしょうか。調査に行かなかった人にも書いてもらいました。

— この手紙は、石母田正先生からのものでしょうか。東京大学出版会の原稿用紙に書かれています。出だしが「前略 『歴評』の『国民的歴史学について』を拝見しました。・・・『歴評』の文章を拝見して、近来にない感銘をうけました」とあります。この出だしの部分を、加藤先生が引用されていたと思いますが⁵⁹。

これは「石間をわるしぶき」についてのぼくの意見を、石母田批判を交えながら書いた文章⁶⁰への返事です。石母田先生は書きながら、自分でしょっちゅう校正して訂正文をつけていきます。石母田先生の文は、特徴ありますね。

— 貴重な資料を見せて頂き、ありがとうございました。

『石間をわるしぶき』（339 頁）に説明がある。

⁵⁷ 東京都立大歴史学研究会「連載 沢戸部落の歴史 石間をわるしぶき」『学園評論』第1巻第3号、1952年10月。同「第二回 沢戸部落の歴史 石間をわるしぶき」『学園評論』第1巻第4号、1952年11月。

⁵⁸ 本多公栄：1933～1995年、社会科教育・歴史教育専攻。

⁵⁹ 加藤文三・前掲『石間をわるしぶき』、345頁。および、同「若き日の石母田さんの姿？」『石母田正著作集 月報2』岩波書店、2000年、4頁。

⁶⁰ 加藤文三「国民的歴史学について—研究会の歴史から—」『歴史評論』第44号、1953年4月。前掲『石間をわるしぶき』に収録されている。

8. 江東区立第二砂町中学校の社会科教師

— 都立大学を卒業して、1953 年 4 月に東京都江東区の中学校の社会科教師になるまでのことをお聞かせ下さい。

中沢君は「風呂屋の番頭する」と言って大学をやめました、ぼくも「労働者になって勉強するんだ」と言って、労働組合の書記になろうと言っていました。実際になったのも何人もいます。そのときに太田秀通先生から「教員も労働者だから、教員になるのもいいんだよ」と言われました。

それで、教育学部の先生が砂町小学校（江東区北砂）の校長をご存じで、ぼくを砂町小学校に連れて行って紹介してくれました。その校長から「中学校が新設されたから教員を採用するんじゃないか」と言われて、そこから第二砂町中学校（江東区東砂）に行って、そこに勤めることになりました。教員になったのは都立大の先生が尽力してくれたからですね。決まったのは、大学を卒業する直前でした。

— 新制大学 1 期生の加藤先生は、戦後の新しい教員免許をお持ちだと思いますが。

新しい制度の最初に取りました。教育実習は附属高校であったと思いますが、たしか品川にあった学校です⁶¹。教育実習には行っていましたが、他の教職の科目は足りていませんでした。そのため、就職が決まってから、教育学の先生に最敬礼してお願いをし、「仕様ががないなあ」と言われてハンコ押してもらって、単位を取らせてもらいました（笑）。

— 加藤先生の『教育のすすめ⁶²』を読むと、新設の中学校の若い先生が元気いっぱいにやっているという感じですが、第二砂町中学校はどのような学校でしたか。

第二砂町中学はできたばかりで（1952 年 4 月開校）、当時は学校の前がすぐ海でした。家庭訪問は大変でした。

はじめに行ったときは 1 学年が 4 クラスでした。だんだん増えて 8 クラスになりました。はじめは A 組 B 組 C 組 D 組とやっていました。8 クラスになると E 組 F 組 G 組 H 組となるのですが、H 組はどうかということで 1 組から 8 組になりました（笑）。

教員は 30 人くらいでしたが、いろいろな人がいました。蝶の専門家、うどん粉菌の専門家、縄文土器の専門家で自分の研究会を作った人などがいました。学士院会議の選挙権を持った人が 5～6 人いました。面白い同僚がたくさんいました。そういう雰囲気は古い学校にはなかったものですね。

⁶¹ 東京都立大学附属工業高等学校。同校は東京都立工業短期大学附属高校を経て、1962 年の東京都立工業高等専門学校の新設時に閉校となった（現在は東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス）。

⁶² 加藤文三『教育のすすめ』地歴社、1983 年。

- 『教育のすすめ』では、教師になられた数年の時期に取り組まれた『起重機』『元八幡』^{もとやちまん}『母の歴史』といった、いくつかの文集を紹介しています。まず、1年目に手掛けられた『起重機』についてお聞かせ下さい。

教師になってから、学級文集の『起重機』、地域の歴史を探究した文集『元八幡』、3年生の文集『母の歴史』を出しました。それらはここにありますが。これが『起重機』第1号⁶³で、第4号まであります⁶⁴。

- 第1号は学級文集ですが、だんだん書く生徒が拡大して、第4号では学年の文集になっていますね⁶⁵。ガリ版刷りですが、文集のいくつかの箇所には色のついた絵があります。第4号では石母田正先生からの第3号を読んだ感想と生徒からの返事が掲載されています。

これが、そのときの石母田先生の手稿です。色の絵は消しゴム版画かと思います。

- 第1号の序文を校長の島田義雄先生がお書きになっています。島田先生は社会科で、おもしろい校長先生でいらしたようですが。

この頃は校長先生とも仲良くやっていました。校長も組合員でしたし。校長がおかしくなったのは日の丸・君が代からです。はじめは掲げていませんでしたが、だんだん上からの圧力が強まってきました。意見も分かれてきたときに、ぼくが校長に提案して、「国歌斉唱」を全員が座ったまま聞いていることにしませんかと言いました。では、そういうことにしようとなりました。それが続いてきましたが、ぼくたちが大量にいなくなったら、さっと復活しましたね。今、大学に日の丸・君が代を持ち込もうとしていますよね⁶⁶。あれも大学をすぐにだめにしますね。

- 教員2年目の1954年度に、「地域の歴史」として第二砂町中学校の近くの神社の元八幡（富賀岡八幡宮）について、スライドと文集を作ったことをお書きになっています⁶⁷。こちらの新聞の切り抜きは、『元八幡』のことを紹介した当時の記事ですね。「郷土愛の

⁶³ 『起重機 — クレーン 江東区立第二砂町中学校1年C組』謄写版印刷、B5版、表紙・本文全28頁、1953年6月15日。

⁶⁴ 文集『起重機』は、加藤文三・前掲『教育のすすめ』63頁以下の「第一章 生徒と一体になる—『起重機』」に抄録されている。

⁶⁵ 『起重機4 江東区立第二砂町中学校第一学年文集』謄写版印刷、B5版、表紙・本文全54頁、1953年12月15日。

⁶⁶ 2015年6月16日の国立大学長会議で、文部科学大臣が入学式・卒業式での「国旗掲揚」・「国歌斉唱」を「お願い」したこと。「要請」という事前の報道に批判が相次ぎ、「お願い」となったが、大学への事実上の圧力となっていると批判された。

⁶⁷ 文集『元八幡』は、加藤文三・前掲『教育のすすめ』135頁以下の「第二章 地域に根をおろす—『元八幡』」に収録されている。

スライド元八幡」、「移る姿を天然色で — 広重の浮世絵や芭蕉の句碑も紹介」、「第二砂町中が苦心の制作」とあります⁶⁸。

『元八幡』を作っているときに、砂町に住んでいた俳人の石田波郷^{はきょう}さんに会いました。地域の資料を作る立場について、いろいろ教わりました。元八幡とか郷土の歴史とか、石母田先生の言う「民衆のいるところ、どこにでも歴史がある」というのを、そのままずっとぼくは意識してきました。

その後のことですが、小学校や中学校でも使えるようにと、江東区の歴史というのを、3年間にわたり1冊ずつ作りました。『江東風土記』、『江東の歴史』、『学校歳時記』の3冊です⁷⁰。ですから、「国民的歴史学」は、今でも続いていると自分では思っています。歴史学の「江東の歴史」という立派な学術書はありますが、民衆を当てにした江東区の歴史というのはありませんでした。そういう人でも手にして分かるようにまとめました。ちょうど「主任手当⁷¹」というのが出ていた時期で、それを拠出して費用にして無料配布しました。以前、革新都政⁷²というのがありました。浅沼稻次郎⁷³は江東区の深川に住んでいました。革新自治体の京都の蜷川虎三^{にながわ}⁷⁴は江東区深川の明治小学校の出身で、つまり江東区が生み出した人材でした。そういうことも含めて分かってくれるようにということで書きました。そんなこと書いている本は他にないですけどね。

9. 『母の歴史』

— 『母の歴史』についてお聞かせ下さい。『教育のすすめ』では、『母の歴史』の最初は教員2年目の1954年の3年生に夏休みの課題として父母の歴史を書かせたことから始まると説明されています。そして、「歴史というものが自分たちの生活とは関係ないところで進んでいくものと思いこんでいる」生徒の誤解をただしたり、「歴史は人民が動かしていくものだという視点」を持たせたりするためにも、「まず、生徒に父母の歴史をたどらせてみる」とお書きになっています⁷⁵。当時、同様の取り組みが何人かの先生がたによってなされていますが⁷⁶、加藤先生にとって『母の歴史』のきっかけはどのようなもの

⁶⁸ 『読売新聞』「江東版」、1955年11月15日。

⁶⁹ 石田波郷：1913～1969年、俳人。

⁷⁰ 東京都教職員組合江東支部編『江東風土記』あゆみ出版、1985年。同『学校歳時記』あゆみ出版、1987年。同『江東の歴史』あゆみ出版、1987年。いずれも編集委員会代表は「加藤文三」である。

⁷¹ 主任手当：一部の校内分掌の長を主任として、該当の教員に支給する手当。教員管理の強化であるとして、これに反対した教員たちが支給された主任手当の受け取りを拒否していた。

⁷² 革新都政：日本共産党・日本社会党などの革新勢力が支持した美濃部亮吉が1967～1979年の3期12年にわたり東京都知事を務めた時期の東京都の地方自治政治のこと。

⁷³ 浅沼稻次郎：1898～1960年、政治家。日本社会党委員長として演説中に暗殺された。

⁷⁴ 蜷川虎三：1897～1981年、政治家。7期28年にわたり、京都府知事を務めた。

⁷⁵ 加藤文三・前掲『教育のすすめ』、176頁。本書には1955年度の3年生の『母の歴史』が収録されている。

⁷⁶ 加藤氏が『母の歴史』を始めた当時の生徒による歴史執筆をめぐる動向については、加藤氏自身が前掲

であったのでしょうか。

きっかけは、やはり石母田先生の文章に触発されてです。父の歴史、母の歴史を取り上げようと、石母田先生の『歴史と民族の発見』の中の論文「母についての手紙」から思いました。教科書には偉い人の歴史ばかりで民衆が出てこないからというものもありました。ここに『母の歴史』やこのときの資料があります。

— 『母の歴史 東京都江東区第二砂川中学校第二回生』とあります⁷⁷。これは業者に出して印刷・製本したものです。ね。「母の歴史」と言っていますが、「父の歴史」もあります。特に母に限定していたわけではないのですか。

ええ、「父の歴史」もあって、両方です。父のことだけを書いている人も結構いました。名前が「父の歴史」よりも「母の歴史」のほうが格好よかったからです（笑）。ここには、生徒のお父さん・お母さんが書いた感想があります。生徒の書いたものを読んだ感想です。これは新聞の切り抜きです。

— 新聞には「揺らぐ歴史教育」、「日本の有難さを」 父母の声に政府も便乗、「まず“父母の歴史”から」とあります⁷⁸。記事には「東京江東区第二砂町中学校教諭加藤文三氏は、“正しい歴史教育”を推進する方法として『母の歴史』を取り上げた」と書かれています。

『母の歴史』を見ますと、8月15日とか関東大震災とかテーマで生徒に聞き書きをさせてまとめさせてと言うことがあったかと思うのですが、加藤先生ご自身が参考にしたものはあったのでしょうか。また、先行した「母の歴史」の実践はご覧になっていましたか。

先行したものは見ましたが、参考にしたものというのは特にはないですね。

— 加藤先生ご自身も『母の歴史』の持つ課題をお書きになっていますが、それも含めて『母の歴史』を授業ではどのように活用されたのですか。

『母の歴史』を全員に配って、授業では、誰々君のお母さんはこういうことがあったよとか、話していました。

母の歴史は、スーッとすぐに、通史にはつながらないんですね。ただ書かせることはで

『石間をわるしぶき』（349～351頁）で1973年に整理している。本書には1954年度の3年生の『母の歴史』の抄録が所収されている（初出は、東京都第二砂町中学校三年生・指導編集加藤文三「母の歴史」『歴史地理教育』第8号、1955年4月）。

⁷⁷ 『母の歴史 東京都江東区第二砂川中学校第二回生』謄写版印刷、B5版、表紙・本文全56頁、1955年12月15日。

⁷⁸ 『読売新聞』「江東版」1955年9月9日。

きて、それを授業の中で活かしていくのは難しいです。自分の外にあるものを取り上げないと歴史にならないし、自分の生活をそのまま出してということもできません。母の歴史というのは、せいぜい関東大震災とか、二・二六事件とか、断片がいくつかあるだけで、社会的事件とのむすびつきもあまり多くないし、まとめるのがすごく大変なんです。綴る母自身も自分の歴史を体系立てることは難しいので、ぼくも体系立てるということは真剣には思っていませんでした。そういう意味では、父の歴史のほうが歴史の流れに沿って使いやすいですね。

— 1973 年発行の本の中で加藤先生は、『母の歴史』について「現在でも、歴史をおしえるたびに生徒にかかせている⁷⁹⁾」とありますが、その後も継続されたのですか。

ずっとは続けられませんでした。先ほどお話したような難しさもありましたし。そのうち、生徒が悪いこととして母親を呼ぶと、その母親が卒業生であつたりということもありました（笑）。同じ中学校に 29 年もいるとそうなります。

10. 社会科授業

— 加藤先生が中学校の教員になられた 1953 年度は 1951 年版学習指導要領が実施されていた時期で、社会科は社会と日本史が別枠でありました。『教育のすすめ』には、当時の授業時間が、1 年生：社会 5、2 年生：社会 4・日本史 1、3 年生：社会 4・日本史 2 と書かれています⁸⁰⁾。

日本史も、一般社会も持ちました。

— 教科書はどのように決めていたのですか。

当時の中学校では教員が決めていましたので、学校によって教科書が違いました。いい時代でした。

— 『歴史教育の資料と扱い方』について伺います。共著で 1965 年に発行されて、さらに増補版が 1975 年に発行されていますが⁸¹⁾、もともとは『歴史地理教育』に 1959 年 3 月（第 41 号）から 1962 年 1 月（第 69 号）まで、24 回にわたって連載された「講座・歴史教育の資料と扱い方」であつたと伺っています。この連載はどなたの提案であつたのでしょうか。

⁷⁹⁾ 加藤文三・前掲『石間をわるしぶき』、351 頁。

⁸⁰⁾ 加藤文三・前掲『教育のすすめ』、251 頁。

⁸¹⁾ 加藤文三・鈴木亮・吉村徳蔵『歴史教育の資料と扱い方』大村書店、1965 年。加藤文三・鈴木亮・吉村徳蔵・黒羽清隆・槐一男『増補 歴史教育の資料と扱い方』地歴社、1975 年。「増補版」は 1990 年代まで発行された。

ばくだと思います。はじめは吉村徳蔵⁸²さんの他に、阿南健一さんと本多公栄さんがいましたが、まもなく阿南・本多のお二人が抜けて、途中（第 61 号、1961 年 5 月）から鈴木亮⁸³さんが加わって 3 人になりました。はじめは本にする予定はありませんでした。

— 『昭和戦後史』を見ますと、月刊連載をしていた時期は、加藤先生にとって安保改定反対闘争にあけくれた日々であり、また、ご結婚されたりと、実にお忙しい中でのことであつたと思います⁸⁴。ここには「しばしば吉村徳蔵の家に泊まりこんで⁸⁵」とも書かれています。別な文では「楽しかつた共同執筆 三年間の泊込みの討論を集積」というタイトルをつけて、「吉村・鈴木両氏と熱論」と書かれています⁸⁶。

吉村さんの家によく泊まり込みました。鈴木さんはあまり泊まらなかったですね（笑）。鈴木さんは資料の地図とか年表とか、そっちを主にやってくれました。

— 加藤先生には、吉村先生との共著のものが他にもありますが⁸⁷、後に書かれたものには「あらかじめ分担はきめたものの、熱心な討論で赤字がいっぱい入って、どこを誰が書いたのかはわからない共同執筆でした⁸⁸」とあります。共著と言っても実際にお二人で一つの文を検討したという意味での共著なのでしょうか。

そうです。共著は大変ですが、ぼくは共著が好きで、たくさんあります。

— 連載していたときのもの、1965 年に発行したもの、1975 年に増補版で発行したものはそれぞれ内容が異なるようですが。

書いたときのものは、そのままでは本にできませんでした。歴史が変わっていますから。全く新しく書きました。増補版では黒羽清隆⁸⁹さんと 槐 一男⁹⁰さんが主に付け足してやってくれました。一番若い黒羽さんは「自分は医者にかかったことはない」と自慢にしていたけど、最初に亡くなりました。

⁸² 吉村徳蔵：1926～1992 年、社会科・歴史教育専攻。

⁸³ 鈴木亮：1924～2000 年、世界史・歴史教育専攻。

⁸⁴ 加藤文三・前掲『昭和戦後史 上』、120～166 頁。

⁸⁵ 同上、166 頁。

⁸⁶ 加藤文三「自著紹介 楽しかつた共同執筆 三年間の泊込みの討論を集積」『季刊歴史教育研究』第 38 号、1966 年 1 月、40～41 頁。

⁸⁷ 例えば、次のような論考がある。吉村徳蔵・加藤文三「戦争をどう教えるか」編者代表高橋碩一『三一書房版 社会科教育大系 第 3 巻 歴史教育の課題』三一書房、1963 年。

⁸⁸ 加藤文三「私の歩みと歴教協 いまはじめてのことやりたいこと」『歴史地理教育』第 582 号、1998 年 8 月、92 頁。

⁸⁹ 黒羽清隆：1934～1987 年、日本史・歴史教育専攻。

⁹⁰ 槐一男：1929 年生まれ、西洋史・歴史教育専攻。

- 連載時には、はじめに日本史について吉村先生とお書きになり、後に世界史について吉村先生・鈴木先生とお書きになっています。特に、この世界史は何かをもとにして作ったのでしょうか。教科書ではないと思いますが。

教科書でもないです。何ももとにしていません。自分たちの教育実践から、そのようにしました。

11. 『歴史教育論の展開』(1973年)と『すべての生徒が100点を』(1976年)

- 1973年に『歴史教育論の展開⁹¹⁾』にまとめられた1960年代の加藤先生の論稿について伺います。この中の「サンドウィッチよ さようなら—歴史教育における日本史と世界史—」(初出は、1962年6~8月⁹²⁾)が大きな議論を呼びました。1958年版学習指導要領で教育内容に規制が強められ、文部省の指示で日本史と世界史がサンドウィッチのように適当に挟みこまれる状況のもとで、「世界史をどこであつかうか」から始まり、歴史の研究と教育の持つ本質にまで議論が進められたものと存じます。そもそも一番の問題はどこにあったとお考えですか。

生徒が歴史を発展として見られないというところです。日本史の一番いい変革の時期に、日本史をそこで打ち切って、世界史が入ってきてしまい、歴史のつながりが切れてしまいます。例えば、明治維新は偉大な変革ですが、授業ではそれをやらないで世界史でヨーロッパに行ってしまうようなことがありました。「中学生は、弁証法の論理をどこまで学ぶるか⁹³⁾」で書きましたが、日本史学習での一人の生徒の思考を追いました。中学生でも弁証法の思考をしていく見事なものでした。だけど、途中で世界史が入ってくると、歴史のつながりが切れてしまって、そういう発展の仕方ができなくなってしまいます。

- 「世界史独立論」として出発した議論を、加藤先生ご自身が『歴史教育論の展開』で整理されていますが、具体的な授業としては、どのように進めていたのですか。

世界史を最初にやって、日本史をその後にやるという、それでしか方法がありませんでした。当時は1年地理、2年歴史、3年公民で、歴史は週に4~5時間やっていました。具体的には、4月から人類の発生を始めて1学期に世界史を終えて、2学期から日本史をずっと現代までですね⁹⁴⁾。この展開でやっていきました。

⁹¹⁾ 加藤文三『歴史教育論の展開』新日本出版社、1973年。

⁹²⁾ 加藤文三「サンドウィッチよ さようなら (一)~(三)」『歴史地理教育』第74~76号、1962年6~8月。

⁹³⁾ 「中学生は、弁証法の論理をどこまで学ぶるか」は、加藤文三『すべての生徒が100点を』(地歴社、1976年)の第3章である。

⁹⁴⁾ 加藤文三・前掲『歴史教育論の展開』49~51頁に表が記載されている。

— 加藤先生の世界史の授業と言えば、『すべての生徒が 100 点を』にあります「ササン朝ペルシアをどう教えるか」をととても面白く拝読しました⁹⁵。生徒を「知的探検」に出させるという内容ですが、教科書でろくに説明していないササン朝について、「先生が知らないのだから、生徒はみんなで調べろ。先生も調べてくる。これは宿題だ」と言って、あえてササン朝で教室が盛り上がっている姿に感動しました。授業には何かコツがあるのでしょうか。

これは面白かったですよ。コツなんかありません。ササン朝のようにチラリと見えるの
がいいんですよ。女性と同じですね（笑）。

とにかく、難しいことばかりを言わないで、〈何が何である〉という当たり前のことが面白いから、それに〈なぜ〉なんていうことが加わると、とっても面白いから、苦勞することないですよ。面白いことばかりで。

— 『すべての生徒が 100 点を』の第 2 章「すべての生徒が 100 点を—「知識」と「生きる力」—」（初出は、1975 年 12 月～1976 年 4 月⁹⁶）は、書名にもなっている論文ですが、雑誌掲載のときに大きな反響を呼んだと聞いております。高校に入学できない生徒を出さないために、全員が 100 点を取るまで生徒と保護者に呼びかけながら、再試験を何度も繰り返していく加藤先生の姿がととても印象に残ります。「この報告を、涙を流しながら書いた⁹⁷」とお書きになっています。暗記とは、学力とは、などの多くの問題が議論されましたが、今もなお解決しておりません。

高校が中学生を取ってくれなくなって、これ続けました。ある数学の先生からは「テストをすれば 100 点の生徒と 0 点の生徒がいるのが当然だ」とか、「全部の生徒が 100 点をとるのはまやかした」とか、言われました。「易しい問題を出して 100 点を取らせている」というような批判も出てきました。基本的なことで、家でやってきているようなことを出していただけなんですけれども。

100 点を取ると、子どもは変わりますね。小学校のとき特殊学級に入れられていた生徒がいたことを書きましたが、この生徒はちゃんと高校に入って、大学にも入って、卒業して就職しました。卒業生のクラス会をやったら、それにも出てきてくれました。書きませんでしたでしたが、他の生徒にもそういう子がいました。意識すると自分で勉強するんですね。教えるほうも一緒になって勉強したのが楽しかったです。この体験は、子どもたちもずっと覚えていて、今でも卒業生は懐かしがっていますね、そのころを。

⁹⁵ 加藤文三・前掲『すべての生徒が 100 点を』の第 1 章「まず、楽しい授業を（ササン朝ペルシアをどう教えるか）—知的『発見』の旅をさせる」。初出は、加藤文三・前掲「歴史教育の理論化のために（一）まず、楽しい授業を—ササン朝ペルシアをどう教えるか（1）」および同「歴史教育の理論化のために（一）まず、楽しい授業を—ササン朝ペルシアをどう教えるか（2）」（『歴史地理教育』第 240 号、1975 年 8 月）。

⁹⁶ 加藤文三「すべての生徒が一〇〇点を（一）～（最終回）」（全 5 回）（『歴史地理教育』第 245～249 号、1975 年 12 月～1976 年 4 月）。

⁹⁷ 加藤文三・前掲『すべての生徒が 100 点を』、「まえがき」iii 頁。

— 1974 年の入学生から始めたとお書きになっていますが、その後もずっと継続されたのでしょうか。

第二砂町中学で続けてきましたが、中学校を変わってからは、やりませんでした。教育実践というのは、一人だけではできません。第二砂町中学では、やるべき条件が整っていました。

— 先ほどお話の中で出ましたが、『すべての生徒が 100 点を』の第 3 章「中学生は、弁証法の論理をどこまで学ぼうか⁹⁸」について伺います。この論文に感銘を受けたと感想を述べる人がたくさんいます。いわば歴史学の考え方そのものを中学校で進めていこうというものと存じますが、いかがでしょうか。また、加藤先生は何を参考にされて、このような授業を進めたのだろうかとも思いました。

そうですね。松本新八郎先生に都立大で教わって、それから歴史が面白いと思いました。中学生でもよく考えているでしょう。

— はじめから弁証法の論理を踏まえて考えさせていこうと思って進めていたのでしょうか。

そんなことを考えていないです（笑）。

— この中で、プリントで事前に学習させた上で、授業で生徒たちがどのような考えを述べ、ノートにどのような感想を書いてきたのかを分析しています。当時の他の授業実践報告でも同様の流れで授業が展開されています⁹⁹。

教科書に書いてある内容は、だいたいプリントで、自分で調べるようにしています。だから 1 時間で教師が教えることというのは、全部プリントで自分のノートに書いてあるわけなんですよ、答えが。

— この本（『すべての生徒が 100 点を』）の 155・173・177 ページにあるのが、プリントの例ですね。また、本には生徒のなまの声がたくさん掲載されていますが、授業では録音されていたのですか。

⁹⁸ 同上、第 3 章「中学生は、弁証法の論理をどこまで学ぼうか—『考え方』を深める—」。1959 年度の 2 年生の記録をもとに 1975 年に執筆したものである（「まえがき」iv 頁および 148～149 頁）。

⁹⁹ 加藤文三「近・現代史の学習—生徒の自発性を育てるために—」『歴史地理教育』第 38～40 号、1959 年 1～3 月。加藤文三・前掲『石間をわるしぶき』に収録されている。

プリントは、家でやって来いと言うものです。予習ですね。授業が始まったときには基本的にみんなが全部その時間のことは分かるようにしてあって、その上で、ちょっとひっくり返します。教科書どおりのことをやらないで、とにかく、生徒が思い込んでいることを、ひっくり返していくのが楽しいですよ。

書いたのは、なまの声です。ぼくは授業中、生徒の意見を一生懸命筆記していました。授業では、ぼくがしゃべるのではなくて、もっぱら1時間は生徒がしゃべったことを筆記しています。しかも、クラスによってまた全部違うから、これは書かないと。

生徒は、とにかく楽しいらしいですね。ぼく自身はよく分からないけど（笑）。

— 加藤先生が授業で大切にしてくられたことは、何ですか。

とにかく何か自分の心の中でびっくりするようなことが、毎時間ひとつあれば、1時間の授業はそれでいいのではないかと思います。いろいろなことがあります、全然知らなくて、自分自身がびっくりしたという過程を、生徒にも体験させれば、生徒が自分でびっくりしながら、何か学んでいくのではないかと思います。

— 当時、授業で中学生に話した中で、何か印象にあるものはありますか。

地球上で最も長い山脈は、知っていますか。生徒に質問すると、ヒマラヤ山脈か、ロッキー山脈か、アンデス山脈と答えます。地図をよく見たことがないんですね。地図を見ると、アイスランドから、地図で青い海の中を白い線が走っています。白い線は浅い所で、海底に山脈が走っているのです。その白い線が大西洋を南に通って、アフリカの南端を通って、太平洋に入り、マリアナ海溝のところまで続いています。海の下に長い山脈があります。「海の中で火山が噴火して泡が噴出しているんだ。《海底ブクブク山脈》だ」と言っていました（笑）。生徒はそういうのをすぐに覚えます。この前、同窓会がありましたが、ぼくの顔を見るなり「先生、海底ブクブク山脈、覚えているよ」と言われました（笑）。

12. 退職から現在の活動

— 第二砂町中学校には1953年から、いつまで勤務されていたのでしょうか。

29年いました。1982年に同じ江東区の深川第六中学（江東区平野）に転勤し、53歳で、早めに退職しました。40歳前後から「うつ病」で苦労することが多かったです。

— 著作を見ますと、退職された後も精力的に執筆をされている様子ですが、特に退職された前後から看護関係での執筆が見られます。これは、何か事情があるのでしょうか。加藤先生が『蘭学事始』などについて書かれていたからでしょうか¹⁰⁰。

¹⁰⁰ 例えば、加藤文三『学問の花ひらいて—『蘭学事始』のなぞをさぐる—』（新日本出版社、1972年）な

看護史の専門家の皆さんと20年くらい月1回でぼくの家で勉強会をしました。看護史研究会の講演会があって、ある年にぼくが呼ばれてしゃべりました。終わってからコーヒーでも飲みながら、「私たちも本格的に日本歴史を勉強したいのだけど、一緒にやってくれますか」と言われたので、「はい」と言って、それから始まりました。なぜ、ぼくだったのでしょうか、ぼくにも分かりません。皆さん^{そうそう}錚々たる看護史の専門家ばかりでした。勉強会の日は、遠くからもここに来てくれて、朝から夕方まで議論していました。

今も皇族の人が赤十字の総裁とかやっていますよね。皇室に対する思い込みがあって、聖徳太子とか、光明皇后とか、看護に関わる伝説を信じていたようなことがありました。他にも宣教師と牛乳に関わることなど、いろいろなことが信じられていました。これを勉強しながら、くつがえしていくのが大変でしたが、面白かったです。

この勉強会で、6人の女性の皆さんが分担して『看護学生のための日本看護史』を作り、その後で『看護学生のための世界看護史』を作りました¹⁰¹。今もテキストとして使われているようです。皆さんよく通ってきてくれたと感心しています。

— 『川合義虎¹⁰²』(1988年)、『^{かめいど}亀戸事件¹⁰³』(1991年)、『^{まさのすけ}渡辺政之輔とその時代¹⁰⁴』(2010年)の3冊は、もともと退職後に書かれた「南葛労働運動史」の原稿からの抜粋とお書きになっています。これも加藤先生が勤めていらした江東区周辺の地域の歴史という意味があると感じましたが、いかがでしょうか。

「^{なんかつ}南葛」という言葉がすごく愛されていました。例えば、演劇の実践では、南葛なんとか祭とか、工場をつくると南葛なんとか工場とか呼んでいました。南葛とは、昔の南葛飾郡^{かつしか}のことで、今の江東区、江戸川区、墨田区、葛飾区あたり、東京の下町にあたります。千葉には「東葛」があります。「南葛労働運動史」は頼まれたものではなくて、自分で好きに書いていました。書いているうちに、どんどんページが過ぎてしましまして、これでは本にならないとお蔵入りになっていました。その中から、ぜひ本にするようにとってくれる人がいて、3冊まで出すことができました。

一昔前は亀戸事件の犠牲者は9人でした。実際には「純労働者組合」の中筋宇八という犠牲者もいて10人でした。苦勞して、亀戸事件の詳細を確定しましたが、苦勞した甲斐が

どがある。

¹⁰¹ 看護史研究会編集・加藤文三協力『看護学生のための日本看護史』医学書院、1989年。同『看護学生のための世界看護史』医学書院、1997年。他に、『日本人いのちと健康の歴史』全5巻(汐文社、1991年)が加藤氏を編者の一人として発行されている。

¹⁰² 加藤文三『川合義虎—日本共産青年同盟初代委員長の生涯—』新日本出版社、1988年。河合義虎(1902～1923年)は南葛で活動した労働運動家・革命家。亀戸事件において殺害された。

¹⁰³ 加藤文三『亀戸事件—隠された権力犯罪—』大月書店、1991年。亀戸事件は関東大震災(1923年)の混乱に乗じて南葛の労働組合の運動家たちを亀戸署に拘束し、警察と軍隊がひそかに殺害した事件。

¹⁰⁴ 加藤文三『渡辺政之輔とその時代』学習の友社、2010年。渡辺政之輔(1899～1928年)は南葛で活動した労働運動家・革命家。官憲に追われ台湾で自殺した。

ありました。川合義虎も、亀戸事件で殺されています。渡辺政之輔については、このあいだ、ある会合で、渡辺政之輔は共産党の指導者の中で一番努力した功績ある人だったと話しました。正統の伝記もなく、それにふさわしい待遇を与えられていません。これでは、いかんと思ひましてまとめました。

その後の発行の予定はありません。読者に負担を求めるような悪いことは、もうしないです（笑）。

— 「祭りの歳時記」を書きたいと1998年にお話しされています¹⁰⁵。加藤先生は、『昭和史歳時記』（青木書店、1978年）・『民謡歳時記—くらしの文化史—』（上・下、青木書店、1980年）・『昭和戦後史—歳時記ふうにつづる戦後の歩み—』（上・下、青木書店、1984年）などの著書もたくさんありますが、「祭りの歳時記」はお書きになったのでしょうか。

「歳時記」の本の中には、俳句をたくさん引用してありますけど、季語で分けてありますし、見つけるのが大変でした。「祭りの歳時記」は出ませんでした。青森のねぶた、仙台の七夕と、そういう調子で日本全国まわりました。ぼくは旅行が好きで、都道府県の全部をまわっています。だけど書けなかったです。そこ（1998年の文）に書いてありますけど、祭りはだいたい夜が多くて、夜に弱いぼくにはそれがつらくて。それから祭りというのは始まってから長いんですよ。とにかく、やる人は一生懸命やっていますけれど、とても付き合えきれなくなりました（笑）。

— 現在も卒業生の皆さんと、勉強会を継続されていると伺いました。

月1回1時間、第二砂町中の卒業生が集まって、歴史の勉強会をしています。「私たちも勉強したかった」と言って、卒業生のお母さんもいます。3年5組をもとにした会だから「珊瑚会」（さんごかい）といいます。会の名前をどうしようかというときに、ぼくの頭の中には「珊瑚海海戦¹⁰⁶」の珊瑚海が浮かびました（笑）。海の珊瑚は地球最古の生物なので会が長く続くようにという思いもありました。

— どのようなきっかけで、勉強会が始められたのでしょうか。

細かいことは忘れてしまいましたので、創設メンバーの8回生の鈴木秀子さんに確認しましたら、1988年4月の『生徒会がたちあがった¹⁰⁷』の出版記念会だったそうです。その会で約20年ぶりにぼくに再会した鈴木さんが、ぼくの授業を思い出して「あの授業をもう

¹⁰⁵ 加藤文三・前掲「私の歩みと歴教協 いまはじめてのことやりたいこと」、93頁。

¹⁰⁶ 珊瑚海はオーストラリア北東側の海の名称。アジア・太平洋戦争中の1942年5月に日米間で史上初の航空母艦同士の海戦が行なわれたことでも知られる。

¹⁰⁷ 青木章八・加藤文三共編『生徒会がたちあがった—第二砂町中学校生徒会の記録—』光陽出版社、1988年。

一度聞きたい」と思わず言ったところ、ぼくは「やってもいいよ」と答えたそうです。鈴木さんは仕事や子育てが忙しかったのですが、この機会にということで「文三先生の授業をもう一度聞きませんか」という沢山の葉書を同窓生に書いて、それで「珊瑚会」が始まりました。もう30年くらい続いています。

— 現在は、何を勉強されているのでしょうか。

ぼくの本を少しずつ読んでいますが、今は『江東の歴史』を係の人が拡大コピーしてくれて、やっています。前は、ぼくが東陽町（江東区）に通っていましたが、体を壊してからは、皆さんがここに来てくれています。卒業して何十年もたっているのに来てくれるのは、ありがたいですね。

— 加藤先生は「石間をわるしぶき」や「母の歴史」でやってきたことを、『江東の歴史』や「珊瑚会」の今まで継続されてきていると感じたのですが。

そうですね。違うことはやっていないですね。

— 「石間をわるしぶき」は、国民的歴史学運動について語られるときに、かならず取り上げられてきました。国民的歴史学運動は挫折したとされてきましたが、加藤先生は、「私は、『国民的歴史学』の運動が『挫折』したことなど知らなかったし、『挫折感』などはまったくなかった。・・・第二砂町中学校の・・・生徒と砂町の地域のなかで、『国民的歴史学』の運動でみがかれた感性和理論をどう発展させるかに情熱をかたむけ、今日まできたのである¹⁰⁸」と1973年にお書きになっています。

特に網野善彦¹⁰⁹さんは失敗に終わったという説なんですよ。ぼくは「今も、『国民的歴史学』の時代の精神で生きている¹¹⁰」とも書きました。だから、民衆の中により深く入ろうと思っていました。友達には中学校の先生から高校に変わり、高校から大学に行った人もいますけど、そういうことは、全然ぼくにはなくて、それで『江東の歴史』みたいな本に至るのですけれど。

— 加藤先生は『歴史地理教育』などで多くの連載を手掛けてこれ、それをご退職後も続けてこれました¹¹¹。世界史や日本史の様々な出来事を取り上げた「この月のできご

¹⁰⁸ 加藤文三・前掲『石間をわるしぶき』、347頁。

¹⁰⁹ 網野善彦：1928～2004年、日本史専攻。

¹¹⁰ 加藤文三・前掲『石間をわるしぶき』、347頁。

¹¹¹ 例えば、以下のような連載がある。加藤文三・本多公栄・吉村徳蔵「講座100時間の日本史学習」（1～32）『歴史地理教育』第305～348号、1980年4月～1983年3月。加藤文三・他「現代人のための日本歴史」（1～20）『文化評論』第237～293号、1981年1月～1985年8月。加藤文三「1945年あの日あの日」『歴

と」(1987 年～1989 年)を見ますと¹¹²、話が関連する音楽のことに移る場面が多いように感じました。加藤先生は、音楽にもとてもお詳しいと存じますが。

前にも話しましたが、父が帝劇に通っていたような軍人でしたので、ぼくも音楽が趣味です。このノートは、1 日 1 行で、1 ページがひと月のぼくの日記です。その日にあった出来事とその日に聴く予定の音楽を書いています。買って持っている CD を聴く予定の順番をつけて、1 日だいたい CD が 1 枚として書いてあります。その日に聴く音楽が決まっているんです。毎日、ちゃんと目標があるから退屈しません。100 歳になる 2021 年 3 月まで予定が入っています。今、85 歳ですが、100 歳の誕生日にはバウマンというホルン奏者のモーツァルトのホルン協奏曲を聴くと決めています。だから、それまでは死ねません(笑)。

— 最後に、歴史の教師として、大切にされて来られたことをお聞かせ下さい。

ときに「げんてん」に触れることが、やはり貴重なことだと思います。この「げんてん」は〈原典〉と〈原点〉を区別していないで言っています。ぼくも資本論を塩田研究室から借りて「げんてん」で読んだり、プラトンを日本語訳ですが「げんてん」で読んだり、ああいうのを読むと自信がつきますからね。古事記や日本書紀も面白いですよ。細かいことにこだわらないで読めば、読んだことで当たれますから。ですから、年中は無理ですけど、ときどき「げんてん」で自分を掃除することが大切だと思います。

— 長い時間、お話をお聞かせ下さいまして、本当にありがとうございました。

後記

いく度ものインタビューの願いを快くお引き受け頂き、興味深いお話を伺い、貴重な資料を見せて頂くことができた。それにもかかわらず、加藤先生の幅広い活動と膨大な著作のごく一端を垣間見たに過ぎなかったのは、聞き手の力不足によるものである。現在も継続されている歴史と教育に対する一貫した姿勢には感服するばかりであった。

最後に、お忙しい中、全面的にご協力を賜りました加藤先生に心から御礼申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用させて頂きましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)

史地理教育』第 528～541 号、1995 年 1 月～12 月。

¹¹² 加藤文三「この月のできごと」『歴史地理教育』第 411～439 号、1987 年 4 月～1989 年 3 月。